

最優秀賞（臨床工学技士部門） 丸宮千冬

はじめての手紙

「病院の方々のおかげで、自宅に戻れて本望、と主人は旅立っていくことができました。」ある患者さまのご家族からいただいたお手紙を紹介させていただきます。

肺炎はいえんの増悪ぞうあくで緊急入院され余命宣告よめいせんこくをされた患者さんは、ネーザルハイフローが手放せない状態でした。ストレスや不安から患者さんはわがままな態度をとりスタッフは困惑する事もありましたが、最期は自宅で迎えたいという患者さんと献身的な奥さんの希望を叶えるための在宅プロジェクトが立ち上がりました。

現時点でネーザルハイフローの在宅向け装着はありません。そのため在宅用人工呼吸器じんこうそきゅうきを擬似的に調整する必要があります。ある事と、私自身人工呼吸器の在宅支援経験が少ないため、先輩やメーカー



さんに協力してもらいながら機器の調整や奥さんへの指導を行いました。退院に向けて他職種を交えたカンファレンスを何度も重ねるうちに、患者さんを中心にした結束力が強まっていくことを実感しました。

そしていよいよ退院当日。病院スタッフが患者さん宅に一緒に同行する事となり、臨床工学技士としては私が行くことになりました。はじめての経験であり不備がないよう何度も確認しても不安でたまりませんでした。ご自宅に戻られた時の嬉しそうな表情は今でも忘れられません。

数ヶ月後に息を引き取られましたが、奥さんからのお手紙を読んで、悩みながら向き合ってきた数ヶ月は支援になっていたのだとホッとすると同時に、とても嬉しく思いました。急性期病院きゅうせいきびょういんに籍を置く私にとって長期間患者さんと密に関わる機会は少ないですが、患者さんご家族の最期に寄り添えたのかもしれない。この経験の後にも人工呼吸器の在宅支援に携わる機会がありました。まだ模索段階ではありますが、患者さんご家族に寄り添っていけるよう努力していきます。

